

緩和ケア病棟入院患者の予後予測における経口摂取と身体症状、性差の関連

進行がん患者の意思決定において、正確な予後予測の果たす役割は大きなものであり、そのために様々な予後予測ツールが開発されている。それらの中でも PPI(Palliative Prognostic Index)は信頼性が担保されている上に簡便に使用できることから、広く使用されているものの一つである。しかしながら、他のツールと同様に一定の割合で予測から逸脱する症例が存在する。本研究の目的は、緩和ケア病棟へ入院した進行がん患者のうち PPI による予後予測を逸脱した症例にみられる特徴を探索し、患者の意思決定の一助とすることである。

日本赤十字社医療センター緩和ケア病棟に入院した進行がん患者を対象とし、診療録を参照し合計で 675 例の経過を追跡した。PPI による予測と比較して実際の生存期間の長かった群、短かった群で共通して抽出された関連因子は、経口摂取が著しく減少しているかどうか、であった。また、疼痛以外の症状がある群では予測よりも実際の生存期間が有意に短く、一方で女性患者は予測よりも実際の生存期間が有意に長かった。

緩和ケア病棟に入院した進行がん患者について予後予測を行う際、経口摂取の状況が与える影響がより大きい可能性がある。また、疼痛以外の身体症状の有無、性差の影響があることも想定される。PPI を用いた予後予測は精度の担保された有用な手法であるが、本研究の対象となった症例においては、これらの因子についてあわせて考慮する必要があることが示唆された。